

ハクストハウゼンの見た一九世紀中葉大ロシアの農民家族

肥 前 栄 一

一 まえおき

ドイツの農政学者ハクストハウゼン(August Freiherr von Haxthausen, 1792—1866)はロシア政府の委嘱により、一八四三—四年にロシア各地を旅行して農事情をはじめとするロシアの社会事情を視察し、その結果を主著『ロシア社会の研究』(三巻、一八四七—五二年)ならびに『トランスカウカジア』(二巻、一八五六年)として公表した。⁽¹⁾彼の研究は、一方ではロシアの農民生活とりわけミール共同体の実態をはじめで西欧に紹介すると共に、他方ではミール共同体の太古性、またそのアソツィアツィオンとしての性格を強調することによって、ナロードニキの共同体社会主義に影響を及ぼしたのであった。以下では主として『ロシア社会の研究』に見られるハクストハウゼンの農民家族Ⅱロシア社会観を紹介したい。

ハクストハウゼンによれば、ドイツの伝統的な国家が

「封建国家」(Fudalstaat)であるのに対して、ロシアのそれは「家父長制国家」(Patriarchalstaat)であつて、⁽²⁾イエ(ドヴォル)↓ムラ(ミール、オブシチナ)↓クニ(ツァリースム)という、いわば家族的構成の上に立脚し、農民家族はその基礎単位をなしている。農民家族は、擬制的血縁関係の支配と私的土地所有の欠如とによって特徴づけられるロシア社会のミクロコスモスである。かつてロシア建国期にヴァリヤグ人はゲルマン的な封建制の原理をロシアに導入したが、それは民衆の間に定着せず、それに代つて発達したこうした家父長制原理は、ヨーロッパに類を見ないものであり、最古のオリエント諸民族の社会原理に近いものであった。ロシア人はきわめて社会的であると共に、血縁関係(本来的ならびに擬制的な)を重視する。⁽³⁾

(一) Studien über die innern Zustände, das Volksleben und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Rußlands, Erster und Zweiter Theil, Hannover

1847, Dritter Theil, Berlin 1852. (以下では Studien-Völger⁽²⁾): Transkaukasien. Andeutungen über das Familien- und Gemeindeleben und die socialen Verhältnisse einiger Völker zwischen dem Schwarzen und Kaspischen Meere. Reiseerinnerungen und gesammelte Notizen, Erster Theil und Zweiter Theil, Leipzig 1856. なお拙著『ドイツとロシア——比較社会経済史の一領域——』(未來社 一九八六年)一六三—一六七ページを参照された。

(2) Studien, T, 1, S, XI.

(3) Studien, T, 3, S, 123—126, 198—200.

二 イエの構造

ロシアのイエ(農民世帯^{ドヴォル})においては、財産共有と家長の下での家族員の平等とが特徴的であった。

フーフエ制と長子相続制との条件の下で、フーフエの相続権者たる長男のみが家長として共同体員たりえたドイツの農民家族と異なり、ロシアのドヴォルにあっては、全ての兄弟が成人して結婚しても、平等に同一世帯内にとどまり拡大家族を形成する。⁽¹⁾土地は新夫婦に対してムラから割当てられ、用益権がみとめられる。「土地」所有権の主体は……共同体という不滅の道德的な人格であつて、その

構成員はかゝるものとして共同体財産の全ての比例配分を受けて用益すべきものである⁽²⁾。すなわち、フーフエ所有権者であることが共同体員たりうる条件であつたドイツとは逆に、ロシアでは「不滅の道德的な人格」たるシール共同体ないはその基本単位であるドヴォルの構成員であることによつて、おのずと用益地が全員に配分されるのである。このような土地配分原則が行われているがゆえに、ロシアのドヴォルは西欧的なプロレタリアートを産み出さず、アソツィアツィオンとして機能しているのである。

ところでロシアの農民世帯は擬制的血縁集団という性格を帯びている。すなわち、イエから長期にわたつて離脱すると血縁者であつても土地用益権を失うし、逆に非血縁者が養子として血縁者に擬せられて、家族の中にとり込まれている。「ロシア人は強い家族の絆なしには生きられない。もし家族のない時には、擬制的な家族をつくる。例えば実の父がなければ、誰かを父に選び出して、実の父同様にこれを敬愛する。同様に、子供のない者は養子をとる⁽³⁾」。例えば、ヤロスラヴリ県ゴラピヤトニツカヤ領では、老人、遠縁の老女とその末娘(一四歳)、死んだ姉娘の夫とその後妻と五人の子供、つまり血のつながらない人びとの構成する農民家族が見出されたが、こうしたケースは少くなくつた。このようにドヴォルはルーズな、開放的で流動的な性

格を備えていた。⁽⁴⁾

ドヴォルにおいては、早婚が慣行化していた。すなわち、私領地では、若い農民は結婚によってムラから土地割当てを受け、自立した地位を獲得しうるために、早婚を有利とし、農場領主もまたチャグロとそのオブロクないし賦役をヨリ多く獲得するために、これを奨励した。また王領地でも、人口調査に先立って新世帯は共同体から土地配分を受け、かつ働らき手としての嫁を迎え入れることがイエにとって有利であったがゆえに、早婚が行われていた。ムラにとっても、チャグロの増加は賦役負担の軽減を意味した。⁽⁵⁾

家父長の地位につくのは原則として父親であり、次で長男、伯父等で、他人であるばあいさえあった。家父長制原理にかかわらず、家父長の地位はムラから配分された共有財産の管理者としてのそれに限定されており、逆に女性の地位は高く、「ヨーロッパの家庭では夫が君臨し妻が統治するの」に、ロシアの家庭では妻が君臨し夫が統治する」といわれた。⁽⁶⁾ そのさい、ロシアの家父長はやさしくて、養子を実子同様に可愛がり、決して抑圧しないが、一方、民謡には悪い継母がしばしば出てくるのである。財産共有制のゆえに、結婚によって家族の外に出る娘は、嫁資以外には何ももらえなかった。⁽⁸⁾ 極端な早婚⁽⁸⁾ 児童婚（児童と年長の娘との結婚）にともなうスノハーチェストヴォ（舅と嫁

との性的関係）のポリガミー的慣行がみとめられた。⁽⁹⁾

一方、ノガイ・タートル人、チェレミス人、チュヴァシユ人といった少数民族においては、購買婚とポリガミーとがみとめられた。⁽¹⁰⁾

- (1) Studien, T. 1, S. 128.
- (2) 前掲拙著、一八九—一九〇ページ所収の覚書。
- (3) Studien, T. 1, S. 109, 145—6.
- (4) Studien, T. 3, S. 145—6.
- (5) Studien, T. 1, S. 128—9, 前掲拙著、一七九ページ所収の覚書。
- (6) Studien, T. 1, S. 56—58, 214, 前掲拙著、二七五ページ所収の覚書。
- (7) Studien, T. 1, S. 233.
- (8) Studien, T. 2, S. 164, 前掲拙著、一七六ページ所収の覚書。
- (9) Studien, T. 1, S. 128—9, 前掲拙著、六二—三ページ。
- (10) Studien, T. 1, S. 442, 459—60, 492, T. 2, S. 371—4.

三 ムラの構造

「家族の觀念がロシア人にとってはゲマインデにも転用

されている⁽¹⁾。イエの拡大形態がムラであり、ミール共同体は擬制的な拡大された農民世帯であつて、そこでは、スタロスタ（長老）の家父長的支配の下で土地共有とイエの間での定期的割替⁽²⁾個別的用途とが行われている⁽³⁾。

そもそもムラはイエの拡大をつうじて形成された。すなわち家族構成員が増加すると世帯が分裂するが、しかし依然として複数の家族が土地を共有し、共同耕作を行ない、共通の家父長（長老）を維持しつづけたのである⁽³⁾。——こうした土地制度の下では、父親の持分地に対する子供の相続権は成立しえず、かえつて息子たちは共同体メンバーとしての自分自身の権利にもとづいて、共同体に対して持分地を要求することができる。スタロスタは擬制的な父親であり、村民は擬制的な家族員である。

ミール共同体は、ドイツの封建的な村落共同体のようなフーフエの相続権者のみからなる封鎖的で特権的なコルポラツイオンではなく、全てのドヴォル成員からなる民主的で開放的で流動的なアソツィアツイオンである。よそ者も共同体集会の決定にもとづいて兄弟として迎え入れられ、土地を配分される⁽⁴⁾。全員が土地配分を受け、共同体員資格を獲得するから、ロシアには西欧のようなプロレタリアートの成立する余地がない。

ムラの中では、洗礼のさいに与えられて胸につけてい

十字架を交換して成立する、いわゆる十字架兄弟⁽⁵⁾義兄弟の関係がとり結ばれることもあつた。

ムラが相当に大規模であるばあいには、イエとムラとの間に、中間的な労働⁽⁶⁾相互扶助組織が形成されることがあつた。四五人の成人男性からなるカザン県クラスナヤ・スロヴォード農場では、こうした労働組織は血縁関係の土台の上に編成されていた。同様の親族的な中間労働組織はトリオフェロ農場やベニユヴァ村にも存在した⁽⁶⁾。

(1) 前掲拙著、一七六ページ所収の覚書。

(2) Studien, T. 1, S. XI, T. 3, S. 198—200.

(3) Studien, T. 3, S. 124—125.

(4) Studien, T. 1, S. 155—6, T. 3, S. 64. 前

掲拙著、一七四—五ページ所収の覚書。

(5) Studien, T. 3, S. 146.

(6) Studien, T. 2, S. 5, S. 9, T. 3, S. 152,

S. 485.

四 クニの構造

ムラの拡大がクニであり、民衆の首長にして父親なるツァーリの下に平等に共同体に分れて住む大家族がロシアである⁽¹⁾。

ロシア人を特徴づける郷土愛の欠如と祖国愛の強さは、

こつした血縁意識 (Stammesgefühl) に由来するのであり、それがまたロシア史の土台をなす巨大な内地植民を促進した。「ロシア人の植民熱はロシア人の国民性に深く根差している。……ドイツ人はその故郷をこよなく愛する。生まれた場所、幼時を過ごした村、遊んだ森や牧場や山、父親の家、父祖伝来の耕地は、彼を分かち難く故郷につながる愛をもちつづめる。ロシア人はそうではない！彼はあまり郷土愛をもたない。その代りに強い祖国愛をもっている。また全ての親近者、同胞に対する愛着がある。彼を最も強くしかりつけるのは、故郷の村でも額に汗して耕やした耕地でもなく、人間であり、同胞、隣人、親族なのである。彼がこれらの人びとの間に居るならば、たとえ故郷からはるかにへだたつて居ても、彼は平安なのである」⁽²⁾。

民衆はツァーリに対して、奴隸的な畏怖心ではなく、子供のような畏敬の念を抱いている。彼は献身的なやさしさでツァーリを愛する。皇室財産への崇敬はこのことと結びついているのであり、徴税人が襲われたためしがない。ヴォロクダ県では、徴税人は村で徴収した貢納金の袋をたずさえて、村一番の農家に宿泊するが、部屋の聖画の下に袋を置き、別室で熟睡しても、盗難のおそれはないという⁽³⁾。

ちなみに、ロシアの貴族はプロイセンのユンカーのような土地貴族ではなく、官僚＝軍人たる資格を前提とする

奉仕貴族であった。つまり、一等の將校位かもしくは一四等以上の文官の官職を得なかつた貴族は一人前でなく (nedrosi) 、その状態が三代続く⁽⁴⁾と貴族たる権利を失つてアドノヴォルツィの階級に移行し、逆にそうしたアドノヴォルツィがその家系を証明しつつ自由意志で国家奉仕に復帰したばあいには、再び貴族にとり立てられる⁽⁴⁾。ロシアの貴族は、ヨーロッパの土地貴族に特徴的な郷土愛と相続財産への執着との欠如から、容易に土地財産を売却し、その結果、土地貴族を特徴づける土地所有の安定性を欠いている。「ロシアでは富豪はめつたに三代とは続かない」⁽⁵⁾。またプロイセンの郡長が地方名望家であつたのに対し、ロシアの郡警察署長はその苛斂誅求と知事に対する卑屈さによつて、「ロシアでもっとも憎まれ、軽蔑されている役職」であつた⁽⁶⁾。

こつして要するに、領主―農民関係はクニームラ関係を補完する契機でしかなかつた。「土地はツァーリ＝国民のものであり、地主はそれの一次的利益者にすぎぬ、というロシア農民の観念はまったく正しい」⁽⁷⁾。

(1) Studien, T. 1, S. XI, T. 3, S. 198—200.

(2) Studien, T. 2, S. 5—6, T. 3, S. 137—9.

145.

(3) Studien, T. 3, S. 131—2.

(4) Studien, T. 3, S. 307—8, S. 519. 前掲拙著、二二五—六、二二九ページ所収の覚書。

(5) Studien, T. 3, S. 48, 148. ロシアの農奴は、「自分は領主のものだが、土地は自分のものだ」と考え、貴族の上級所有権¹土地相続権を認めない(Studien, T. 1, S. 154)。

(6) Studien, T. 3, S. 52ff.

(7) Studien, T. 3, S. 138, S. 46.

五 西欧社会に対するロシア社会の優位

ハクストハウゼンによれば、ロシアの共同体制度はロシアにとって多大の利益を意味した。ただし「家長制国家」ロシアでは民衆がアツツィアツィオンとしてのイエームラの中で平等の土地用益権を持つがゆえに、西欧社会を危機におとし立てているペーベル¹プロレタリアートが存在せず、近代の社会問題が発生しえないからである。たしかに土地割替制度は農業の進歩を妨げるが、共同体制度がもつ社会安定化機能の政治的価値は右のマイナスをカバーして余りある。しかもこのマイナスも、小共同体や大共同体におけるかの中間の労働組織やを基本とする共同耕作を復活させ、土地割替制度を廃絶することによって除去しうるのである。²——

このようにハクストハウゼンは、土地共有¹共同耕作という共同体の「始源の状態」を賛美することによって、ナロードニキの共同体社会主義に靈感を吹き込んだのであった。

しかしながらその際、彼は生産力向上の阻害と並ぶミール共同体のいま一つの弊害、すなわち、世帯^{ドボル}への所屬を条件として全員に土地が配分されるという土地配分様式が早婚を促進することによって人口増加をもたらし、かつ共同体の非コルボラティブな性格のゆえにその人口を農村内部に滞留させることによって農村過剰人口を生み出すという機能を見落していた。³ハクストハウゼンの予想に反して、一九世紀の八〇年代以降、農村過剰人口¹土地不足現象の顕在化と共に、保守的なのは¹ロシア農民が全般的に急進化し、その土地要求運動はロシア革命へとつながるのである。⁴

(1) Studien, T. 3, S. 151.

(2) Studien, T. 3, S. 152.

(3) 前掲拙著、九二ページ註(148)ならびにⅢの8。

(4) 前掲拙著、四〇九ページならびに四一四ページ註(1)。

(東京大学・比較社会経済史)